



陽気だより

No.72

2013.3.15

●ホームページからも「陽気だより」
最新号・バックナンバーをご覧いただけます

<http://yotokusha.com/>

図書出版 養徳社 〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL 0743 (62) 4503 / FAX 0743 (63) 8077

養徳社

検索

第8号 (昭和25年・2月号) から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で64年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

仲の良い夫婦

中山慶太郎先生夫妻

もう五年もしたら金婚式を迎えようという私たちに、そんな

こと、人が聞いたら笑いますがな。そもそも、茶呑み友達みたいな年齢ですもの、口喧嘩一つするわけではなし、他目には仲のえ、夫婦に見えるやろうけど、

なか／＼気むずかしい人でね、昔は私もビク／＼もので、なんでこんな人と一緒になつたんやると、何遍思つたか知れませんが、知つてはるやろうと思います

けど、私たちはお父さんどうしが兄弟、お母さんどうしも姉妹で、ふつうの従兄弟よりもつと血の濃い間柄やし、私の方が五つ年上やし、その上におまさ

おばあさんの手で一つ家に可愛がられて育つて来たので、姉弟みたいようなものですがな。結婚するなんて気はお互いにちつとも持つていませんでした。

こんな話になつたんで、うちの系図みたようなものをいってみますと、教祖さんの長女がおまさおばあさん。このおまさおばあさんが福井理助のところへ嫁入つて出来た子供が鶴太郎、

重吉の兄弟で、鶴太郎の長女と重吉の長男が私たちというわけです。おまさおばあさんが福井家から不縁になつて、重吉とも

もに中山家へ帰り、分家した形です。おまさおばあさんが福井家でずっと独りで通つてはつたけど、孫の私たちを手元においてそれは／＼可愛がつて、とくに福井家と中山家とを私たちの時代に、一度結びせたいという



氣持が強かつたんやろうと、今から思えるんやけど、私たちの結婚を望んではずつて、前管長さんや御母堂さんによく聞いてはつたそうや。しかし私らそんなこと知らんし、それに

もともと私の体が弱かつたので、本席さんの娘さんの永尾芳枝はんなんかは、私に福井家は女は一人やし、養子を貰うて分家した方がえ、というて、ある時お父さんに頼んで、神様にお伺いされたことがあります。その時のお言葉の要点は「遺言という理はなか／＼の理である。それを承知してはならぬ。それを承知したことなら一つの台とさとしおこう」という意味のことで、折角、芳枝はんが画策したつた養子迎えの話は、一ぺんにべちゃんこになり、私達の結婚は本ざまりになりました。こんな些細な一身上のことをお伺いすることは、当時ではよく見受けられたことですが、その動機が右に向つているものを左向けようとする下心があつてのとやさかい、後で前管長様に両親が呼びつけられて、ひどく叱られてはつたことを覚えています。

せ「わいのねえナ」といつていたそのねえ(姉)が自分の嫁になつたのやから、遠慮氣兼ねはないし、も／＼固い氣眞面目の人やつたから、家庭生活もこわいくらい厳格で、連れだつて奈良へ遊びに行つたことも一度もありませなんだ。「慶太郎があないにお前にむつかしいのは馬鹿にされぬようにと思つてわざとしてるのやで」と御母堂さんはよく私を慰めてはりました。

明治三十七年の十一月に、山澤為造はんの仲人で結婚さしてもううて三年目には慶一が授けられ、貫子でもせんと、といわれていた体弱の私も一人前の女だと自覚すると、何ともいえん嬉しさで、嬉しかつたことといえばそんなもんだすなあ。なん

しかし時には不足に思つたりしたこともありましたが、私が二十三歳の時、身上を終うほどの大病を患い、布教に出さして頂く心定めをして、御守護頂いてからは、そうして播州へお助けに出さして頂いた頃は、何くれとなく不自由勝ちの中から、暖かい心使いをしてくれましたし、一般の方たちの家庭生活からくらべると足らぬ私のつとめぶりだと思いますが、お互いに大きな声一つ立てることもなく、この頃ではもう喜ぶことばつかりです。ほんまにお互いが神様の思惑も考えず、好き勝手な眞似していたら、私たち、とうに身上を終うていたかも知れへんいゝえ、おのろけやあらしまへんがなあ。

(三木四郎)

〔私論公論〕

許す心

奈良 増川秀雄

私は最近入信した者でございます。そして、この御教えの有難いことは身をもって経験いたしました。その後感じました一つを述べて今後布教してくださる人々の一参考となれば嬉しく存じます。

それは本教においても儒教と同じく因縁説を説かれておりますが、仏教と異なり因縁納消ということが解りやすく述べられているのは誠に結構に思います。ある布教師の先生や諸先生の中にも「あれも因縁、これも因縁」と言われ、受ける方はそれは因縁ごとであると知りつつも、自然と暗い先案じが出、神様より賦与された自由をただ因縁という言葉で束縛されて、明るくあるべき信仰生活を暗く感じた方を多く見させて頂くにつけ、この因縁説をもっと明るく、希望の光を点ずるような説き方はないものかと思えます。即ち「許す心」がもっとあるべきであると思えます。

徳と御守護

北海道 大木夫見

なんぼ徳があるからといって、今日高価な酒、タバコをのみ、料理を

食べ、服装をしている人を見ると、見過ごしえぬ反感を抱く。これは反感を抱く者の嫉妬・羨望とのみ片付けられぬであろう。闇屋どものすることなら、また何をか言わんや。神様の御守護で白米に事欠かず、衣類に事欠かぬと放言する人がもしあつたなら、住むに家なく着るに服なく、配給主食さえ買いかねている人がどんなにいるか知れぬ今日、それは神を冒瀆する言葉であろう。

民衆と共に

静岡 萩田卯平

宗教は人造宗教でありたくないものですというが、人造宗教と天然宗教はどこで区別するか、この点を明瞭に説明してほしいと思えます。

私は西田天香師を尊敬し、一燈園の人々の生活こそ真摯な宗教的生活であり、正に天理教祖の足跡を歩いている人々であると思えます。宗教の教えは堂塔伽藍の中にあるのではない。常に街頭にあるべきものと思えます。

宗教人が伽藍に入り、安逸に流れるなら、それは世に有害な存在となるのではなからうか。天理教はこの辺の消息を、神の守護、お徳として片付けているようである。

宗教家は世の指導者であると思う。天理教が生きた宗教であるというならば、天理教人はすべて街頭に立ち、その生活を民衆と共に置き、教祖の教えを実践してほしい。天理教はもつと良心的であつてほしい。

読む広告

冷え性は離婚の原因となるか

アメリカのある州では、奥様の足がどんなに冷たくても、旦那様は我慢しなければならぬという法律で定められている。日本の旦那様もそうあつてほしいものです。ですが、ここに善良な旦那様があつて奥様の冷たい足に我慢していらつしやるとしても、その旦那様は決して満足してはいらつしやしません。我慢と満足は別物です。我慢

はやがて諦めにはなりません。うが、満足にはなりません。旦那様に諦められた奥様、悲劇が予想されます。離婚とまではいなくても、有名無実の夫婦関係といったような原因が奥様の冷たい足にあるのでしたら、責任は当然奥様にあります。奥様は決して冷たい足で旦那様にふれてはなりません。

世の奥様、足の冷え性は、ただ足だけの問題ではありません。貴女の体の全体に数々のわざわいをなしています。俗に婦人病といわれるものが

それです。足が冷えると腰も冷える。下腹がひきつるよう

にああ成る程、私は冷え性だ、とお気づきになりました方は、一度中将湯をおためしになるようおすすめ致します。貴女方の祖母さんも御存知の薬。体内の血液の循環を正常にする中将湯は冷え性には一番いいとされています。しかも手軽で、お茶がわりにいただけます。

定期購読中

お道の家庭雑誌

陽気

◎定期購読の誌代は1冊で半年分…1,600円(送料共)
1年分…3,200円(送料共)

ゆうちょ銀行の青い振込用紙をご利用下さい。
(口座番号 00990-3-17694 加入者 養徳社)
希望の号を指定の上、お客様の住所、氏名、電話番号をはっきりご記入お願いします。

問合せ先: ☎ 0120-920-398 養徳社 業務部窓口

月刊『陽気』にて好評連載中

まほらま

出久根達郎 書き下ろし

特設サイト間もなくオープン!

教祖在世当時に活躍した
奈良奉行・川路聖謨を主人公とした
幕末奈良のドキュメント小説

養徳社の新刊

反響続々

さんぽ道

篠田欣吾 著

〔改訂増補〕

定価一、二六〇円(税別)

信仰は生活だ!